

卷之三

宋史

忠行



妙見山

小城

千載春下

大林院

とれく氷室山にてみ浦を力行歎歎引る
ニシテあゆるお室のぬきを極めのうとうありとみる

源仲止

新歲さす夏

門木入

うれとあくくくうんともうまお室山ひづり流し山れ水

土門

ぬりまほ通せんじ雪のきゆく日もきる氷室れ山ノト紫

根德院

櫛河橋

同

新勃渠遊四

後成

釣竿くは見とあら明けとへきつり波す山川れけ

廣澤

地

同

新勃渠遊四

前

徑路達秋上

ひふほのひと見てよめく

往へりかた山室のねんよしれぞもさへーーううう

友原
範求

同雜一

山比もてこれかとてせひの月はせばた事小ましけ

天原
草來

新後樂雜下

をとひう哉ノケナム想ううそり一多のひう海ノヒ

天台座
道玄

夙雅春下

ひろ次川にのけくべ柳ノケ見くもゆく馬雨うゆる

為家

一回足敷

ひくほく波すひつみをれ候いまも波ししきらふ

後字
多院

新千載雜キ

ひく海のうへ波波すすりもとすうひ波さものは

賴政

新慶古今ヘキ

ひく海のうへ波波すすりもとすうひ波さものは

懇懐正

若貴賀

ひく海のうへ波波すすりもとすうひ波さものは

酒我

平野

原

同

葛野郡

同押波

ひく海のうへ波波すすりもとすうひ波さものは

能宣

新千載夏

ひく海のうへ波波すすりもとすうひ波さものは

元補

舞古今神波

ひく海のうへ波波すすりもとすうひ波さものは

家隆

縵古今恋二

度瀬の

大和

同

新千載夏

ひく海のうへ波波すすりもとすうひ波さものは

法印

新慶古今夏

ひく海のうへ波波すすりもとすうひ波さものは

定圓

舞古今神波

ひく海のうへ波波すすりもとすうひ波さものは

法阿

舞古今神波

ひく海のうへ波波すすりもとすうひ波さものは

志前

新樂古今

日晚野

同

新樂古今

ひく海のうへ波波すすりもとすうひ波さものは

大納言

新樂古今

ひく海のうへ波波すすりもとすうひ波さものは

氏又

春遠立ゆくせに、鳴小ねひくおだつまむきよも
續古今集上

うきみ丸まふたりお梓弓ひくのくの秋りうきよも

式守内
御王

法良 山根慶 道江

千載春下

孤咲ひしれ山は吹まくかたうすうりうりうりうり山
同秋下

左近中
持是經

同冬

ゆくはやひしれ山は吹まくかたうすうりうりうりうり山
新古春下

刑部
範兼

同冬

風ふくひしれ山は吹まくかたうすうりうりうりうり山
新古春下

道因
法師

新古春下

えさくふひしれ山は吹まくかたうすうりうりうりうり山
新古春下

法因
法師

同冬

ゆくはやちうのうめうめうめうめうめうめうめうめうめ
新古春下

法因
法師

同冬

近はゆやの後より物とてひし八高柳のえどりくす
りく波やひしの山林をやう日を行わりてりかむと月

慶正祭

水をよまこ山木ふびとひこしのちゆた雪海ふたり

深原松

は観社山高根拙宮岡

古今奉下

ひ是よみがいそんりきうてまでよう

蒼霞神祭

山ちこゝれ行く坂うそも危つ安へじよきつせへうるる
はきくらえ教い祓れゆふ草よまたふゑともあやうすけ

貴之
僧正
冥目

同五四

祓毛乃のくもれあおねくへ御いゆといられあうと
不波入

ひ是ノ山よ二月ヌ番うてたぬとつれ事あらる

後卷通釋五

思ふやちやんふかとアリて危ノみうりよ山とみくと
金葉雜一

董生

す治半る院ノちまよするてうちふぞとてひ

思ひ山比くことなりめやまとよう

法師

銅雀秋

まち川の底の三つくらうとすすむはる山そくひしき

忠快

鶴陽集神祇

天津ノ波を吹く音ふとへまてみづれ林の夜の月

良運

大ひもやとい是ハ松よえふりづれハ松あり祝初了ん

吉哥

少ぬ高きアラレうふひ是ハ山ふれ下れ西

同雜下

あれも思ふぬ山ふれしり、繁茂川ふとけぬへ

大納言
師氏女

久永元年十月後陽院院弘法大師奉日雪ノ
ゆりて來る

縦沿遺水瓶

外境やきみ行幸の事とひき代松そめ見る

成長部

王葉難三折勾又日吉遺折勾

弘法

人へとて感しきをひの弘法やこの爲して

上下客

以難難下

正全玄
聖權僧

ひその山小ねいとてをひやく感ふと

日吉地

同神井

聖權現

波せ山や小ひきれの山の風もそしやふ人

成運

波せ山や小ひきれの山の風もそしやふ人

心海

けあひまよられ

向尺歌

ゆらけの波の佛のミセてももえほへよほりとも大

傳教

同

山川あり雲へ波せん鐘よいつあて街けりす

上人

新後石遺難秋

やうめう一疎うきや我山に松木へ窓にづる——写

崔大僧
能建

西日の入雲のため小波せ山を勤むかひ下までよ
えゆりきる。

同尺歌

ううじよ波ともハこせきうち山のトモ蘇ゆくよ

大ひもや波をうけふ高車はとうと門とひの旅りよ

入道二
品羅王
品法
能建

月夜

朴宮

同

ぬ三茶院ノ所財始て日右代弘法大師ゆきつよ
ありうひふうふへまえおへせ事まで禮けり

入道二
品羅王
品法
能建

千歳神祇

教わる日あれどもむく山の繁りアとひくゆめや

大歲
実改

日本大丈代か心と思ひよしより

川さむく鄧れあねは浅りのそやもうのノニ

法橋
性憲西幸下へる梅の方ふらぬてやみたのさすとせつゝ
中原
新古今神祇

えうしうやうのす日ハ晴小松ぢんまよすゆじとも

のうき日幸れ於國社久のうわ山ふきり

てすりしてあげりよ人ハ夜小みしまるこゑ

日幸ノ社ふまちきの年ハ中ノニミ

やりくれれを兼小くもりたものぞや歲よとあと

トナリて日幸れを要りぬよ深めやまづりきよ

葛田
同

三十と思ひ、日を寄人のまゝてすかとゆりきる

年ふとちう一ノ白山とれをモトアラルあを音ととみよ

右京大
夫政輔

自古社歴のひ跋えゆけり

前勅葉神祇

うの浦ふヌのまひぬにてこそとすりあをの江

慈田
同

物日所とうひごとくモハキモテシケ然モア珍ヤクレ

同

うをうき愛めやまくとくかをのれのれのへてこハヤ

日本ハ社ふよケ、まりとく方の中ア大丈と

同

つあへハけの林かられをれとよするうちれ浦は

十種印文

おひやふとえせばとぞとぞとくまゆもみの八月

同

櫻後葉神祇

あえらひきよおの所おもくるかのうひうくあ代ア

臣

農業課
太政大臣

十種御詠よよきてゆまつりり

又度古今神祇

鶯のいづれ八月をめくらみて我らぬはずとあそひ

慈眼

廻りくわきふり又云まちややくはおもし曉のそと

人道觀
王令快

雪ふ子えすよひてゆまつりきる
やけくれそゑにゆすりへ西川玄翁のねの月

權少僧
都良仙

あ人の詠よなうつまる

讀古今詠
靈若遺神祇
みくか又走とひてやまとづれうの白根が雪れゆる里
日衣詠に所せんじよつをゆひきる

後京極
都良仙

さりまと振せば詠か與ふこそきふあき初めふりば小越
天下詠を日衣のふまでう墨うなりのれとせとわる計
日衣とおひれりへりなれば墨うきかとてうらへて

山階入
天台座
主父豪

墨うきかとてうらへりとおまえうくまの筆とせぬし

權少僧
都良仙

同
度け一聲は高海のたのまと日うかがふぬよめうみる

知寔人
天台座

同
あひうちむして山衣く今もううをもとわうけ
かどゆくは日衣ひを走まほせうりと雪を鳴つれ

成賢
天台座

新後樂之教
田沖波
晏つまぜ城壁そんじらうひてや日うのまの波と萬歎
うへりひてや日衣をめりやり歌七の定してもぞふ

成賢
天台座

うへりひてや日衣をめりやり歌七の定してもぞふ
うへりひてや日衣をめりやり歌七の定してもぞふ

成賢
天台座

同
日衣三十首ノ序よりひゆうけ
うへりひてや日衣をめりやり歌七の定してもぞふ

法橋
春晉

玉葉神祇

續十載神祇

くうりつはもあらむ古代かモキヌ振舞すとおもひ
考るる神も是の如きてへりし歴代をゆうてす

擢相守

うりもこゑひ日一ヶ月くもうれと思ひうりに
うりもこゑひ日一ヶ月くもうれと思ひうりに

慈鎮

新経を遺せ
おめくろてき日ひのうひはくまくら

卷之三

明けの日よりの所と都主乃とけの間もかく上
十彈而立て

我院

新嘗はまめれはまみておは朝とおちひとそー

前大僧
止道玄

世人のうちに、自らの沐浴にひん幣とうりぬきを買ひて、
あん様なこと

苟相

わきていたのひひもゆされぬ邊あれや雪の——

前大僧

くわくはりてとひをとくにあはれうまに又芝そふねばよの日
のひよりひて宣れ日あれ數ふ小七のちハ脚筋ふら

成祝
繫了

同
たのもそれあるふつあて裏りに日あんれふるよ達の
那波若慶足敏

為世
行舉

上も下もいたのじ日々のうけなみあまこをも見てくすり
はるか 美濃

幸運律師

用雅賀
西流て、そむきの内海に守らげ。壬辰年小令り送ら
丹波多比郡順和名国都城

光復

日置屋
其の後

匡房

新安畫譜卷上
比孔振嶺 石叟

羽
毛

後漢書

晚山

勾

八雲也 所當田截之 又燒草
火と云々

管原大臣

管原大臣

檜隈宮

紀仲

卷之三

ふぢよゆきや林のほもひをすれりとけむの隈ノ又

沈復文

新刻集

卷首

梓弓ひまつり津川らふのりそと代詮うえ地とあせ初り

山脈孔

肥前

卷之三

中勢
親つ

卷之三

卷之二

宋仁

比古志稿

堂前

りとまつておれやハ高根の池水よし處やハの玉藻川めや

このうちある人達等はひの山へ詣て後世の事
わやく、次よりこうよきひの山神の祀によす
ますひは又もけりミーとヒテカモトヒム

得ける事もあらずせむきつめ也す」とす

壹波

梓弓ひきの矢くらまは井ふりふへふじくれそくす

の奇とあれへりめの所門にふえたるゆゑ

名古屋

愛後拾遺卷二

うそゆるべからぬくふせんがひまつり

七
小
門

謹古△秋下

三としもてある町あとうやちつまわすむと絶うひよろ

同冬

山にそ月もそりとくりう山ノトモホラシララハル

同春一

ソふらん祀しわかふりう山のちこまづけでまにせう

同春二

アリのね候よそへりう山れふたものあはせそくじな

謹老齋以下

りう山のふハトあくうけぬすへ説神のこ際れの祭事

新後撰集一

ソふらん祀か人めをりう山れ扇のあとえう

玉葉第三

守山ノキハ祭もなれどもりけんえの御くわき

新十載集一

ソふらん祀もなれどもりけんえの御くわき

同東川

タヒトケ守山隊も立つてううよ神ハヌやまのてん

那古齋第一

タヒトケ守山隊も立つてううよ神ハヌやまのてん

諸神鄉

同

新後撰集一

寛治元年帰川院の西附大寧寺懇意方神めぞひ

十載外祖

おのびり所代しもと後神めぞひひそちう代のため

匡房

元暦元年ハ上方岐附大寧寺懇意方神めぞひ

神めぞひひそちう代のため

神めぞひひそちう代のため

神めぞひひそちう代のため

同

神めぞひひそちう代のため

謹義雜ニ又治

望月乃湯りとく出づれそゑもくこそ山ハ越り

素性

謹義雜ニ又治

望月牧

信濃

參議

光明天皇

左大臣

前大納

寺八道

左大臣

前大納

續修四庫全書

饭或

四

卷之三

1

（三）「おまえの上はおうどんかいな」とか「お

鄂府遺卷二

はくのじゆうじゆう

後鳥羽

同上

も上あらず、下望むに心地よい。又本領の脇へ入る、御包へえりて久矣

卷之三

卷之二

卷之三

卷首

卷之三

居候上
物此うきも向ひと申小勞れどし盡一寸遺て泊可也

卷八

卷之三

卷之三

新編華莊

卷之三

四

卷之四

卷之三

卷之三

王乘尺敍

アヤリテシ山ノタケ(攀れば山は咲たぬ)

子以觀焉。八豪之士而已。若乃人情之方

内大臣 小大進 家

續見小河

上
城

懷古今貢

卷之三

卷八

通鑑

國朝

九
我の死

卷之三

錄卷右

芥の
さ

同

清江先生集

卷一百一

九山正傳

の文

平行
正規

同上

大正元年
九月

卷之三

不知人
為京師

卷之三

卷之三

卷之三

太政大臣

新編古今圖書

一
行
志
序

卷之三

三
卷之三

卷之三

卷之五

後漢書
玄武山北

卷之六

老漢之秋

卷之三

卷之三

金葉秋
引物の如きり外乎又其處も實に清氣比致すを多聞

袁原
李鍊

同

定房 大納 范求 本原 言屋 事津

同書中
カナカヒロ坂の冥水みかみそつまつれ行う也トシ

高原
喜連
大納
定房
佐原
範求
東三
條院

御坂氏夏代清次川原をもとより月代千坂。先滿し
也。之を爲水ノ字も解て是れは少くありハや處

考原
李平
衣原
範求

テモテモ西行の如きを御坂山室代清次と申しけり

孝原
拿津
衣原
範求
大納
定房
東三
條院
一
久補
前大建
正興招
順應原
小式新
内寺

相坂や清らかうれ新もみと実路をたどりゆのゆ

孝原
李姓
求
衣原
東三
定房
大納
院
允浦
前大建
正興招
順應臣
小式新
內寺
御載持

主葉秋
長門山裏あらうふりのまゝ小ゆき
さとむ

大納定房
東三條院
一丸浦
前大波
正雲招
娘麿庄
小式部
内寺
源氏物語
源氏物語

千歳亭
新勤葉琴山
父とまほふるあおのみくら
よしむら小川の音うなづき

大納定房
東三條院
久補
前大波
正覺招
順應庄
小式莊
心寺
唐載翁
源俊裕
久原道涇
源俊裕
久原道涇
大納定房
東三條院
久補
前大波
正覺招
順應庄
小式莊
心寺
唐載翁
源俊裕
久原道涇
大納定房
東三條院
久補
前大波
正覺招
順應庄
小式莊
心寺
唐載翁
源俊裕
久原道涇

浅見も人をひき立てるに餘れひかう。」とほり

孝原
李平
大納
定房
衣原
範求
東三
条规定
久浦
前大波
正樂招
眼瘡
小式
内寺
御載
源俊
源俊
道涇
久源
兵甲
元之
平中
真女

美川の岩もさすの氷も淺く緩ゆくばかりゆくを
跡多是捕

孝原
李平
定房
大納
範求
東三
條院
前大總
止默報
一弘補
前大總
止默報
小式新
内寺
原俊然
原俊然
道涇
以原
具了
元之
王
平中
真女

五手ノ板も荔生ノう歌よ々々々世をひじ勝たの長篇

大納定房
衣原範求
李原範求
平中真女
元之翔具平道涇
久原源俊昌
心寺小式莊
順應庄
前大波正繁招
久浦
東三條院

山窩

山城

新續古今文

四

不思議で8月1日から連れて御飯を食ふ事無く、ねむと竈火里

同上

新編文獻

管西

若向也まことに此と云ふ事又何と云う乎鐘の事、敢
管廻伏見里 同

前大僧
正長信

さくまに旅せしへき宮也やはせの里八重山もと

不誤

同編三

五

千載秋上

1

何と手へ物う懲——え夏尔や伏シの内くの秋ル也ふく

游
记

四

同神祇

同

往來の松林へかまわぬかも何へるのう。——
山口車如

往來れ松はこのまみ詠ひてみうちふるあらうけは玉瀧

薄川

石清乃子下りてゆけり。女の松の木がやう

往來れ松と伊豆ひてゆけり。松れ松下

あてぬけ。

同

金葉春

往江の松下つまう板の走り坂へ使ふ板のれぬえ
使人不取

もう代の往來りて往來の松を久くと思ひ。これ

歌詠

同連哥

往來れまつうひきしきふうりき新波乃事も和モソウ

不取

焼うどみき。是鳥下頼算こもとて六往江日引のとくとよ

同

心代ひ久し。うあたのうるや神も。へえむ往來れ松不知

信

同別

六年少そ志。こめさん往來れ松はまかうりこひむらん

相薄

同難下

往江の松はまぜう零標跡。また雨あぬ人へうり。ひ

津守

千載松

うこりあせ。う雲と往來のもうじ。やスし。う

有基

同

往江の松はまぜう。ひ。行ふ五うさまく。人ひあす。まよひ。う

成

汽にゆうひ。うかく。まよひ。往來れ松はまぜう。ひ。行ふ五うさまく。

山口

山口

同

ぬかるうわゆりとゆくすりて即ち也江の内

右大臣

往よその去りりうひのほりき月さしのれあも並ひつ
新古今抄上

後唐

法師

同賀

ほおの波の山がとむじらもス一ふねととじりでたり

伊勢

往江よまです下川は故あからず十年へおうこもひる
同

放逐

同賀

ほおの波の山がとむじらもス一ふねととじりでたり

定家

同賀

ほおの波の山がとむじらもス一ふねととじりでたり

雨大船

同賀

ほおの波の山がとむじらもス一ふねととじりでたり

元真

同賀

ほおの波の山がとむじらもス一ふねととじりでたり

角原

同賀

ほおの波の山がとむじらもス一ふねととじりでたり

浪冷

同賀

ほおの波の山がとむじらもス一ふねととじりでたり

三位

同賀

ほおの波の山がとむじらもス一ふねととじりでたり

後村

同

ほおの波の山がとむじらもス一ふねととじりでたり

千代

同

ほおの波の山がとむじらもス一ふねととじりでたり

住吉

同

ほおの波の山がとむじらもス一ふねととじりでたり

佐野

同

ほおの波の山がとむじらもス一ふねととじりでたり

道延

同

ほおの波の山がとむじらもス一ふねととじりでたり

澤守

同

ほおの波の山がとむじらもス一ふねととじりでたり

白基

同

ほおの波の山がとむじらもス一ふねととじりでたり

法明

同

ほおの波の山がとむじらもス一ふねととじりでたり

法明

同

ほおの波の山がとむじらもス一ふねととじりでたり

忠

ほおの波の山がとむじらもス一ふねととじりでたり

忠

うとアリモキひろひとゆんははれにれてふ志三見

ノ人
ノ泉

うとうてべきぬへ日と詠美はをあうとひ

ノ右
ノ左

恒吉の松乃うれしりのききてま室されかねり發そ吹

ノ大政
ノ寺

恒吉の松乃うれしりのききてま室されかねり發そ吹

ノ大政
ノ寺

ねりひす波ひんづれまないに恒吉と也とされん

ノ大政
ノ寺

後三宗院恒吉と一山幸をりつ日と月をけり

ノ大政
ノ寺

右ち小は山幸にためそてやまととせり恒吉の松乃うれ

ノ大政
ノ寺

つるりんもく山幸を恒吉の松乃うれを喫たひとよみ

ノ大政
ノ寺

はうの松代下枝を詠もひてゆよとてうる中つ白ひる

ノ大政
ノ寺

行まひりきりそひと山幸うれひよつて代よりへわく

ノ大政
ノ寺

門にてまひりうへあれとつり奥の山幸恒吉のまつ

ノ大政
ノ寺

詠代より塗始めうる恒吉はまつの縁を然ゆ世をり

ノ大政
ノ寺

邊たれりく行やうへうる恒吉はまつの縁を然ゆ世をり

ノ大政
ノ寺

あらの海やうもまうりぬ乃極ちうり歌連わへはより代と

ノ大政
ノ寺

所後うるまよふみよ恒よもの詠するど是れもて至を

ノ大政
ノ寺

恒吉の岸はみうつまづ詠さひてされよもとしぬねひえ

ノ大政
ノ寺

今りや又文からさせと要らしるかへてをとよへま

ノ大政
ノ寺

詠古の十本のへこうま年とてまことうと際り、せよ内れ文桓也

ノ大政
ノ寺

詠古の十本のへこうま年とてまことうと際り、せよ内れ文桓也

ノ大政
ノ寺

り赤ノ久しま所世よくてかえもりて、遡しはるかに

同族

うこニハ遼役ハ浦代芦るだけあたり方や江よろス湖

前主
補親
左近中
海道前

同難立

そきーのねのふとふまをりつカと心ひぬ瀧川み

太政大
後成
徒二位
左近中
海道前

同神祇

除しまほまゝ遼ノれ遼吉ハ神のちくはらねばらとせと

太政大
後成
徒二位
左近中
海道前

同

しき波よその足と遼ノれ方のまとやハ思をめり

太政大
後成
徒二位
左近中
海道前

同

空のちうめぬれノくれをや今日はれハ松と見まリや

太政大
後成
徒二位
左近中
海道前

同

さうへれ江ハ松モヒキトキア祝を室としく一いふりの月

太政大
後成
徒二位
左近中
海道前

同

往江れも江林以是信してそくアヌリヨウハナリ

太政大
後成
徒二位
左近中
海道前

同

往吉ハ松モワタモ右ふくらめられと思へはれよの月

太政大
後成
徒二位
左近中
海道前

同

往江れも江林以是信してそくアヌリヨウハナリ

太政大
後成
徒二位
左近中
海道前

同

往江れも江林以是信してそくアヌリヨウハナリ

太政大
後成
徒二位
左近中
海道前

同

往江れも江林以是信してそくアヌリヨウハナリ

太政大
後成
徒二位
左近中
海道前

同

往古のねとうすやみ秋アララ岐レハまつハ吹シラカガラク

太宰權
子朝臣
左近中
海道前

同夏

往古のねとうすやみ秋アララ岐レハまつハ吹シラカガラク

太宰權
子朝臣
左近中
海道前

平時廣

同美傷

長子をのたつとす一は江川ねれ極せりうて悲一

康茂公

同五三

いわくし種レモあそ泊古ハねの終まのすゑりとさき

七四
門院

同神井

きよしん世ゆも忘レモミテバ岸よほなにの状

伊勢
大浦

同

ほ江よ八十過ひてくれんやねとく死人の友ともう死

三言達季

同

憂ふより、めむの三そへやせ紙はおとえくとく

定家

同

泊たりねずぬしやう玉壇につけもみくら年を西風

平政村

同

アセツの御代えせば歌りしもて人よ泊志ハ

鳥相

同

おみのひのうちれを向まつとうすや泊志の朴

鳥相

同

お湯のカとくらとアリテシヤは泊志代朴川ノ御

平印

同

泊志代にシリテふすうタキみちレタシハ、おこり

雲津

同

つけてえみううりとこトハ岸の放波なり

忠見

同

淡路瀬ナリキの主ノリ、町あ深カ及ムモミテハ

定家

同別

泊志ハサボノテコト泊志ミテ高木連ぬをモ

後代

同

志ニテシテヒシテ泊志ハモーとモリテ中ノウトヒチ

大河三
源信

同

泊志ナシルハモアキ泊志ハ浦よりをハクモチシアヤ

源信
源信

同

泊志ハ小ダル温波トアリテリテリテアリテナリ

源信
源信

同

泊志ナリテ五ツクリテリテリテアリテナリ

源信
源信

新夏
春下

リ春の志リシテ、泊志ハねりくりる矣、此故也と

前大僧
式乾門

同

これも又秋や桜うし宿泊ハねりくりる矣、此故也と

正津守
源信

仲つぬくぬけて宿老たねのまゝ思ふはとよそう

原葉種

乃新川ももつうりて、同ト松林をすこしのまろ

同致下

波とおもうちくみの速波を川岸よおきる白前川

是則

同音

宿古の松をもと二葉の久くま草のたつゆそひく

左大臣
寺左大
安德大

宿江の流りまきあめあらし岩りとひく松とよそひく

同音

宿江の流りまきあめあらし岩りとひく松とよそひく

同卷五

そぞの壁の端幾むれどうとすをよりまやぢまよみぬ

同卷下

つくしたれやふ人あらすまの浦い凜々されく絶え音よ

行平

復系歌四

うすすぬの浦の白波をせんかすにとりく波八月のれ
うすすぬの浦の白波をせんかすにとりく波八月のれ

原人 不知

者遺語二

因とつこくゆう櫻のちゆくこれこそ風のあすとさ
因とつこくゆう櫻のちゆくこれこそ風のあすとさ

同卷秋

行平

四

新古今

そすの壁の波打の夜もよがり振るふ感かの

卷之三

そまの浦 小笠川 うすい 摩姑木のつゝみとおもと波引清止原

志とやまとまの浦人康陽ありりうへは神の采といふや

卷之三

主ぬい笠ハ神ハ吹氣沙國の有りてもすれどもやうにアラ
家

よりや覺せられぬの妻ハ豈能承るを以てカク子女王

自は乞ひもくさうをまれ浦代みりめそ川むうそふ
庚人
个知

七
宿及池乃日暮を代りテモトコロのモミの浦人

卷之三

子者。使大賓之節，不以私事。不以私事。不以私事。

卷之三

同

卷之三

同上

便當や煙も別々に運ぶのであれども、

信原

（））
（））

立を生みぬり燭のよがれ余はかゝて祀るやうそ

長方

猶復垂垂上

正月九日宿大連之壁看山行之于遼州八月之十五日

卷之三

秋八月之正南方人國守位者也日也臣子人爲之君也

正義の望み滿りて良りやうて、まことに神を扶ひよる所

まつわをまの浦へ飛たるの林も下りて月残みるに

卷之三

鐘口々秋上

ひとりとまのあじて極られ、鏡を照らすより

郁芳院
定鑒

前大納

吉毛良

同秋下

右原
降博

さうはそうの度よりは明石の浦へふをぬじつ
トをうるもすゆす風の望月極やきを打まひ

月化
行平

同

同族

そまの聲川三日月はねえての方うの國へゆる登
たひへき松守くあひうら度吹こゆるをぬいしき遊

同

そまのむかよて

浦の小山をふくらむ君を波ひらかれしお月

大宰大
或高遠

同恋一

そまのあみまちうとわを衣祀ひめゆれひれ時や
不痴人

同雜中

そまに登の浦漕舟の尾と波しおをださき力そりしる

小野
月花

同

浦の島にそまゆも神さんいるかゆるそまのうら里

月化
行平

八又よそまの浦らのる陽またくふ付てもやあく神され

小町

新後撰恋下

そまれ浦の豆いアキテ吉波を月ふまくはれ凡そり浦

爲氏

同

浦の波うけ夜秋とみて月うかれうゑありう人

同

同冬

そまうきぬそまの度より明ぬうておれうら浦

定家

同

ぬる浮日のうてやうらうそまの度より明ぬうておれうら浦

定家

うぬにえ明かうせれ月うれうれとくうあすがる

入首二

同

うゆらうそまの浦波立づるのむりくわく鳴子鳥のれ

少將

新後撰恋二

をくいづる金ともうそまの度より明ぬうておれうら浦

徒三重

同又二集五

すまの度より温めじ波まくわくとて神さんうきうれ

内侍

至葉秋下

そまの浦の余くかあるテ入づれ浦やまく人になひて
そまの浦や天亮との江とれてぬりうれれぬりうれ左大門
定家
光耀峯
辛人道
前政

も端丈の月のよしに及きうてはなでうをまの浦人

權中郎
三郎衛

漕りとまのよしに及きうてはなでうをまの浦人

前未詳
弓相女

同

淡路鷦^{シハ}とふみの浦を近き日向^{ヒタチ}にけはらく波

末隆
二品法
行平
太政令

同

うねくとくわくからうりつ下やみまの隈

見京極
行平
太政令

同

まれふ事内こすりよ千鳥とぬいほねよねや思

行平
太政令

同前

お波り野す。林えふるきんぐく谷山小うそまの浦は

行平
太政令

同

月夜と神にひてもこむるしきをまはゆゆの浦のまのれは

行平
太政令

同前一

松ゆ、城り玉ぬい浦は、圓ちんやよさじりうし

行平
太政令

同冬

雪滿爐^{ヒロ}と重ねたうるて町面^{マチマツ}かまくらハ浦り波

行平
太政令

同

玉きの登の玉ぬい圓^{マツ}の板ひきゆり月も光よめう

定家
太政令

同前上

玉きの登の玉ぬい圓^{マツ}の板ひきゆり月も光よめう

定家
太政令

同

島ゆるあらもとくもきの玉の玉の玉^{ヒサギ}千鳥^{チドリ}の月

定家
太政令

同前上

玉きの浦^{ヒロ}に良らの赤^{アカ}を登^{アガ}て夕^{ハヤ}く淡路^{タナヒ}山^{サン}也

定家
太政令

同

ひうてそみくをうれとぬれ^{ハシ}八幡^{ハチ}高尾^{タケ}山^{サン}也

定家
太政令

同前

御^ミすまの國^{クニ}うの握^{ハグ}ね^シく波^{ハシ}とほこれる^{ハシ}わ

定家
太政令

秀次名遠生四

みここるにとすのへ江よもゆれりてや人ふゑ

ひくえき

登蓮

庄太道主

後漢書三

鈴鹿

山川三

伊勢

大改

正道主

はづくますうのへ江よもゆれりてらき月をれりて祀外
さの胡

ももをす處よりよもゆれりてふ乃ある左門

不知

越ぬてふるとよびうそくり山よもゆれへりしとふと

庄五郎

若達井上

正道主

こふ事りやりふりらしくか越てぬこりひくもす

不知

せよられを又と越りそくの山を八分にりるやき通

行製

立葉冬

行製

かくしりおほくもくの思ふとりもてすゆ

行製

み月夜に日と海まく小経原八十里川をもさす

行製

あくしむ地級のそくう山をもく園のアリヤス

行製

新古今集

行製

七十の年ゆううくそくりあ老の波うなづけう過一ま前大曾
位隆升

ウリもへてひくうあるそくう山越うんふる信承と小弁
新後撰春下

きてそきぬをや致原れ定ひし振れ行王業志三
あがぬ力もげ高代そくう山とくのに行あとくらむ余婦

野文よりかあふそ

同遊二

すくの川八十せば波をかうそて波りぬ神れやあくはア小馬
續十載春

そくの山ぬひとちうきそハナとわせせりく郭みしれ能宣
風雅秋下

霜千載神旅

ト急よえくふりそく山ぬあはりとくぬまほほ

新拾遺詩

そくの山今更越てすすむすすむ林にわびひ

同

近原山八十せば波の互のゆも我のるは波を折院西鑒

新後拾遺詩

うり挂て波とも越し鈴原山送やよその日も守なり

同游

赤原川うねぬ波もだうそひて八十波小余れやうぬの波源兼氏
橋き村

新拾遺詩

そくの川うき波と行へまそ波も波もあう所代のよ

同游

そくの川譯るひよ國越てそくふくうなゆる也のよ

新後拾遺詩

そくの川水やせよと波よと八十せば波りいやはまて

同游

鶴原川うねうねとこしまで波せう波れめくまや

菊田河

同原

新拾遺詩

つりんや波の海の波りく離くれよて絶に人う波れ徒三位
打家

新後拾遺詩

よしゆとすううの海の波うじよれよ波乃神りうすん稚律師
稚捕

正みの川にうちありこそ

上下畠

下緒

駿河海

駿河

新拾遺詩

つりんや波の海の波りく離くれよて絶に人う波れ徒三位
打家

新後拾遺詩

よしゆとすううの海の波うじよれよ波乃神りうすん稚律師
稚捕

前大曾
位隆升

小弁
余婦

庄家

小馬
余婦

能宣
能臣

親王
利多詩

能宣
能臣

別乳葉參

さうち山夕飯まで伊がえれとみくらうと独立のり
井基

同

わの世人ふみせらや絶せふすみこほ廻のゆふくれれや
成

同

角川かくせんをえどみじやふののそへきりてと子思初おもは
中努むち

源古今服

は里はさきのそみこ川かわを小宿こしゆをしづく月つき島しまよ都つゝくさ親王おおきな

源後葉抄

の鳥とりよりあく角川かくせんのさくば人に名乃なとぞとぞとく法印ほういん

至華藏

とくとくとくぬのをく門部もんべの友ともとくろつひは新拾遺抄

源後葉遺物名

わ代わだからとせと西にく角川かくせんうくやもとくのれとくひ清譽せいよ角川かくせんをひりゆくまきよ候まきよとくふれ都つゝくりづれ法印ほういん

同

山さん四よ方がた事こととく角川かくせんを三事さんじの方がたの馬ばがふり中努むち

新後葉遺物

信濃しんのう古いき又また拾遺しりゆをとくりれちい白波しらなみはすのねみすのうそひの中努むち古今大考こきんたいこうふとゑてわくし山さんよへそとて感かんりの波なみかく神かみ外ほか不知しのぞ信濃しんのう

同

我地われぢをふと立たつとくね山さんよへそとて感かんりの波なみかく神かみ外ほか土左どざ信濃しんのう

同

あちきりくならうね山さんよへそとて感かんりの波なみかく神かみ外ほか大臣おほおみ

同

ありまう山も度のさうり帝の後年す春とまへる

同

ぬれたにそとゆる松山にてを越てくはらひと

同

り年ひほほ三神を被成て身もまのぬつうひりさ
思ひ月の神ゆめ波をあもふらと用うすれあれ松山

同

思ひ月の神ゆめ波をあもふらと用うすれあれ松山

同別

同

いぬあしと安土一岐の山やうきの疊ゆかばと云はば松や風

英一住

新発古々春上

同

船ゆきまほひの山すゑ御小こして思ひへんか

津田
内門
田助

神春下

同

春やえぬよりまた立りしもすとこゆつも名のね

七門
公宗
家之

同冬

同

いまと又春はきうゆもまだまつる浦まゆの山父の月

中宿
大公宗
家之

同春

同

今をそてこゆりことも白波花波の春はまハムやぬ

大公宗
家之

類字名所和歌集算七段

此一部者平見サ一代集數多
之半而抄出名所和歌者也唯
愚暗所撰恐有舛謬猶後思之
輩勿憚改而已

元和三曆仲秋下旬

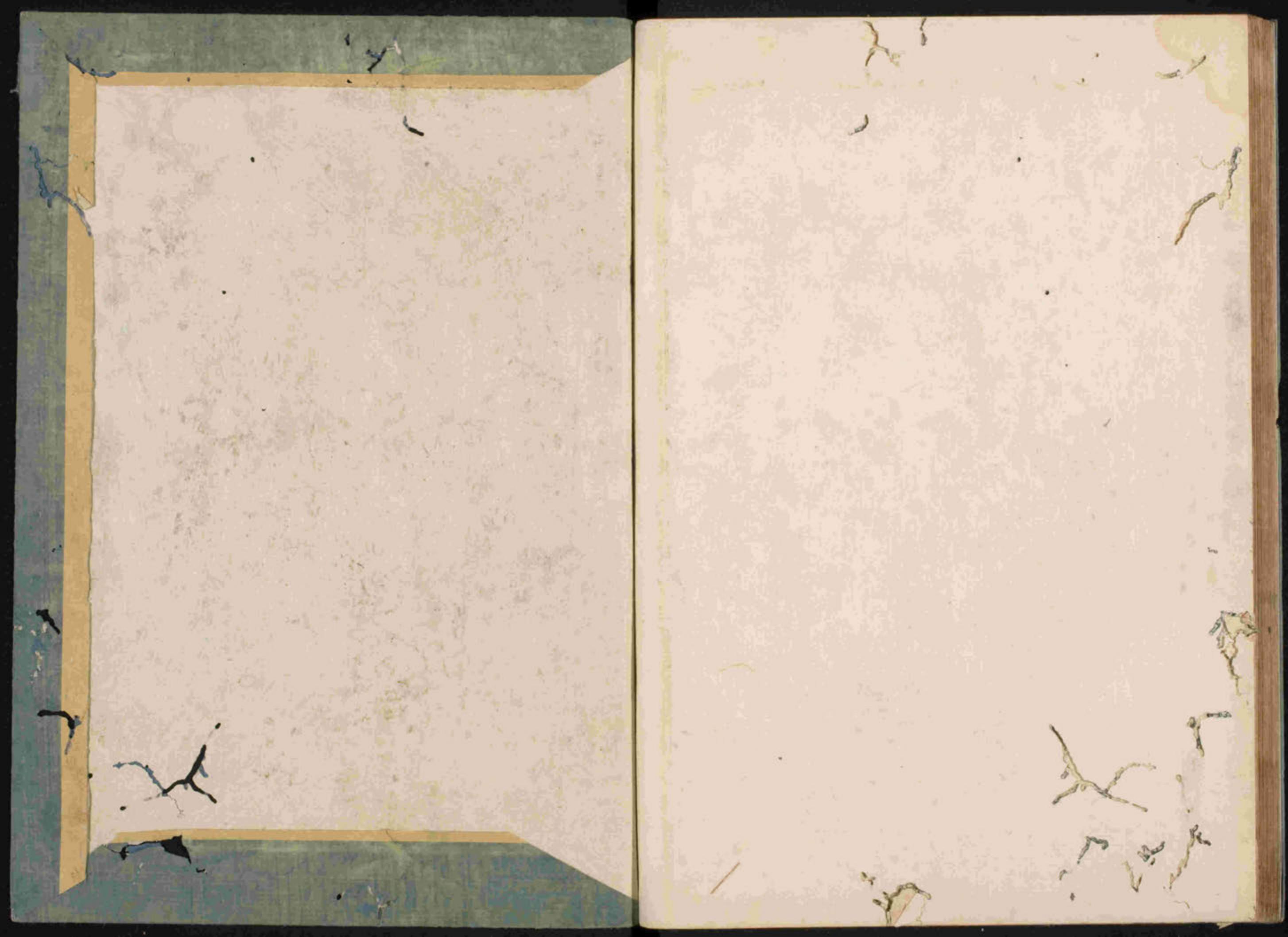
法橋昌院判



於事三觀其效也

亦復因舊業

之數合與
極者而與
目共曉
多字而
如之若
事事一
方難好



110X
421
7